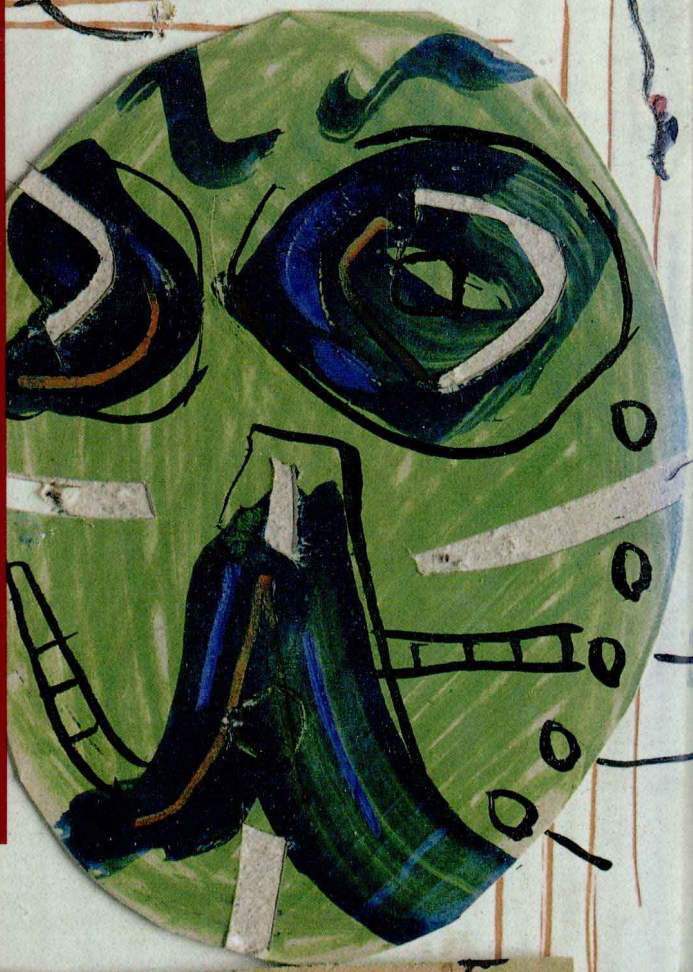




五柳叢書



Mikiro Sasaki

AS A POET

詩人の老いかた

RIPENS

佐々木幹郎

Mikiri Sasaki
ASAPOTI 詩人の老いかた

RIPENS 佐々木幹郎

五柳書院

佐々木幹郎

1947年奈良に生まれ、大阪・河内平野で育つ。1970年、同志社大学文学部中退。同年、詩集『死者の鞭』(構造社)。他に著書として、詩集『水中火災』(国文社)、『百年戦争』(河出書房新社)、『気狂いフルーツ』『現代詩文庫・佐々木幹郎詩集』『音みな光り』(思潮社)、絵本『はこぶ』『たたかう』(日本ブリタニカ)、評論集『熱と理由』『溶ける破片』(国文社)。ビデオ作品、8mm作品なども多数製作。1984年1月～6月まで、アメリカ・ミシガン州立オークランド大学に客員詩人として滞在。

詩人の老いかた

昭和61年8月15日初版発行

著者——佐々木幹郎

発行者——小川康彦

発行所——五柳書院

東京都千代田区一ツ橋2-6-13

〒100-1 電話 〇三(二六四)四四二九

振替 東京2-87479

印刷所——誠宏印刷

製本所——越後堂製本

定価——二、五〇〇円

1 Never say, Never again / 11

羽田五丁目三〇 / 12

水深を測る / 17

「沈む雪」前後 / 20

孤と個の編馬 / 28

Ich—Ich = dämon / 32

ついにこゝろ、こゝろへ！ / 36

彼は昔の彼ならず / 44

一本の指もまたたっている / 52

巡礼 / 55

2 もつと自由に、猥雑に / 69

寺小屋教室からみた現代教育(1) / 70

寺小屋教室からみた現代教育(2) / 73

絵本の制作現場 / 76

3 新しい詩の文法をどこで発見するか？／83

それからわたしたちは／84

むかしむかし／98

連れ出される場所——言葉と「私」(1)／112

物語の最終出口——言葉と「私」(2)／125

書き言葉の中の詩人——言葉と音／139

新しい詩の文法をどこで発見するか？／151

母語の謎を開く映像——翻訳という問題にふれて／156

文字による詩あるいは口語りの詩／162

声の音楽——中原中也の場合／168

4 言葉を洗い出す／177

地下水のエネルギー／178

その問いの声に満ちよ——言葉と現実／183

ねえ／195

一足のスリッパをはいて——言葉と都市／197

変容をどう捉えるか——言葉と定型／210

うずくまる姿勢——言葉と身体／221

鬼はどこにいる／229

言葉と「うた」／238

5 詩人との出会い／251

入門書についての感想風メモ／252

うす明りと溶暗の遠近法——立原道造／266

虚構への距離——言葉と風俗／287

遠火事、あれはあの……幻の／287

立ち泳ぎする男／291

生の扉をかるくノックする／294

ある書き方がきこえる／309

中世という時代のわかりにくさ——吉本隆明「源実朝」を読む／321

落ちる処はまゝの川なるべし——蕪村詩のありか(1)／327

白蓮を切らんとぞおもふ——蕪村詩のありか(2)／339

6 詩人の老いかた／359

老人と海／360

腐敗の方法／363

自然詩人の必敗の地点／366

いかにいやらしく老いるか／368

子供とは何かという問い／373

桃の花見の話／379

詩と詩人へのせつなき思い／381

詩人の老いかた——小野小町と吉岡実／384

7 言葉の生成する場所／397

仮装する舞台——中上健次・津島佑子・村上龍／398

『羊をめぐる冒険』——村上春樹／407

『同時代を生きる』「気分」——川本三郎／411

『紀州 木の国・根の国物語』——中上健次／415

『似た女 想う男』——井上光晴／417

『東京—都市の闇を幻視する』——内藤正敏／420

『楽平・シンジそして二つの短篇』——夫馬基彦／422

沈黙することの喜び——M・デュラスの映画／425

8 さて、一陣の風が舞い上る／431

わが悪漢／432

なぜか双子座ではなかった／434

二〇〇一年の詩集／436

森の魔／440

日本の夜の闇——言葉とまつり／444

一陣の風——あとがきにかえて／457

詩人の老いかた

カバーオブジェ
装幀 高麗隆彦
日比野克彦

わたしたちは とくに

透明なあけぼの

ゆっくりと時間をかけて

発酵することができる

美しい生きものの形

（「舌を打ち鳴らすための五つの音楽Ⅰ」より）

1 NEVER SAY, NEVER AGAIN

.....

羽田五丁目三〇

風景のなかで川が流れていないとおちつかない。どうしてそういう性分になったのか自分でも不思議なのだが、わたしが今まで住んだところには必ず近くに川があった。大学を途中で辞めて、最初に自活し始めた時の職場が大阪の淀川の堤の上だった。河口に近く、琵琶湖から流れてきた淀川が大阪湾に向かって最後に大きく湾曲する毛馬けいばという土地があり、ここで近世の中期に与謝蕪村が生まれたという言い伝えがある。その生家とおぼしき場所は、今は新淀川と名を変えた川床に水没しているが、毎日その方角を見ながら二十四時間勤務の掘立小屋に二年間ほど寝泊りした。その掘立小屋のすぐそばに工業用水取り入れ口があり、淀川の水を暗渠を通して常に一定量、下流の工業地帯に送り届けるという仕事だった。

仕事といっても、これには労働なのか遊びなのか判然としない楽しさがあった、今でもその当時のことを思い返すと、春風や堤長うして家遠し、という蕪村の「春風馬堤曲」の一句がよみがえってくる。時間も湾曲しており、空間も湾曲していた。わたしは川面をながめてあきることがなかった。

そこから京都へ移り住んだが、その京都での最初の住居だけが川とは少しばかり離れている。伏見区の墨染という土地を選んだ時、わたしはアパートのすぐ横を一日に数えるほどしか通過しない国鉄奈良線が走っていること、汽車が堀割りの

中を白煙を吐いて通り、それが山際から見ると一筋の川のように見えるのが気に入ったのだ。勤務先が大阪市内に変わっていたので、淀川と並行して走る京阪電車の窓から、川は毎日ながめることができた。それから北区紫竹に移る。ここから加茂川までは歩いて何分もかからなかった。川原に捨てられている子猫をよく見つけては育てた。少し上流まで散歩に行くと小さな滝があり、その轟きが日常の音全てを消してくれる、そんな長い一日がわたしの心を甘くさせた。

現在は東京の国分寺市に住んでいる。関西育ちのわたしには、最初、関東平野のだった広さが未開地のごとく荒れて見えた。関東ローム層の黒い土がどこまでも足を柔かくさせ、それが不安の最大の材料だった。この平野は底がないのではないか。それに、この都市はまだ一度も「首都の滅亡」を経験していない。近代以来東京は、文化においても政治経済においても単一の「中央」であった。まるで風呂屋の絵看板にある富士山のように。関西の三つの都市、奈良、大阪、京都はどれも一度は首都になった経験があり、そしてどれもが滅亡の経験を持っている。奈良が一番古い亡び方をし、大阪、京都となるにしたがって、滅亡の文化が生まましい。その時間の幅と亡び方の違いが、それぞれ三つの都市の顔付きを作っている。それに比べて東京は……顔がまだ無い。すなわち「首都の滅亡」を一度は経験しないと文化は根に降りていかないのに違いない。

そんなことを考えながら、家のすぐ近くを流れている玉川上水の堀割りをながめると、この人工の川はいかにも怠惰な工事人が掘ったように、朽ちた土の底で少量の水を流していた。

五年が経った。わたしはまだ玉川上水の雑木林の近くに住んでいる。満足もしていないし不満も感じていない。ということは結構住みなれつつあるということだろう。しかしどこかで、この関東平野全部の土地を裏返してみたい。日本近代の象徴である東京という都市を、その文化を裏返してながめてみたいと思っている。つまり「首都の滅亡」の糸口を、まだ亡びぬ都市の真ん中で見るといふことだ。それは幻を見るに近いことなのだが――。

海老取川は羽田空港のすぐ横を流れる川である。東京湾に口を開けるまで、空港入口に向かって四つの橋が架かっている。上流から穴守橋、稲荷橋、京浜急行線廃線橋、弁天橋。

この内、河口に最も近い弁天橋の架かっている大田区羽田五丁目三〇という場所。この場所のこの空間を、わたしは今までに二度、自分の詩の中に登場させた。一度目は一九六七年に、二度目は一九七七年に。その間、ちょうど二〇年の開きがある。一〇年間、わたしはこの平凡な小さな橋の架かっている土地を、日本中で一番行きたくない土地として考えていた。奇妙なことだが、人間にはまだ一度もその場所を訪れたことがないのに、勝手に幻想の中で忌諱する、そういう土地というものがある。行きたくなかったのは、わたしの高校時代の友人がこの橋の上で死んだからである。六七年の当時、その死は装甲車による轢死か、警官の警棒による脳挫傷か、目撃者による意見は二つに分かれた。今、佐藤首相の南ベトナム訪問のための羽田出発――と書くと、この三つともが地上から姿を消していることに気付く。佐藤氏は亡くなったし、南ベトナムという国家は滅んだし、羽田も日本の表玄関ではなくなっ

た。しかし一〇年ほど前にはこの三つの条件が重なって、一人の学生が死んだのである。

わたしは六七年に「死者の鞭」という詩を書いた。それは弁天橋という橋を、ひとつの精神の名によって、死者に向って歌った作品とっていいかもしれない。

時は狩れ

存在は狩れ

いちじるしく白んでゆく精神は狩れ

その作品の中の風景は幻であった。いや現実ではない幻の橋を、自分の胸に叩きこみたかった。一〇年後の昨年の秋、わたしは思い立って羽田五丁目三〇という場所に来た。初めて小さな鉄の橋を見た。その橋の下で五時間ほど座り続けた。川面をながめてあきることがなかった。

この橋は小さいのだ

この橋は四脚の地面にすぎぬ

この鉄の橋のあたり

つり舟

なわ舟

あみ舟